

2022. 10. 30. 主日礼拝説教  
聖書：ルカによる福音書11章1～13節  
『 求めと与え 』

「祈る」ことはどういう状況なのかという問いと答が用意されます。

本日の聖書の箇所では、弟子たちがイエスに対して「祈りを教えて欲しい」と問いかけるところから対話が始まってゆきます。

大別すると次の様になります。

- ①主の祈り(2～4 節)
- ②祈りのたとえ(5～8 節)
- ③神の聞き入れ(9～13 節)

これはマタイ福音書6章9～13節と7章7～11節にも記されていますが、元来ひとつの伝承から生まれた二つの版であると考えて下されば分かり易いかと思います。

例えば、マタイにあってルカにない部分は「天におられるわたしたちの」「御心が行われますように、天におけるように地の上にも」「悪い者から救ってください」等があります。また、3節の「毎日」はマタイでは「今日」、4節aの「わたしたちの負い目」はマタイでは「わたしたちの罪」となっています。

これらの記事が記されたモチーフは初代教会における「祈り」の枠組み整理でした。もちろん字面の問題ではなく、福音の質にかかわる問題として大切に取り扱われております。

さて、①②③共に共通するのは、先ず始めに「求め」があり、次に「与え」があるという点です。つまり、求めに対し必ずそれは与えられるという確認行為、これこそがわたしたちの信仰であるということなのです。

①では、祈りの求めに対し「御国」が与えられます。これは「神の支配」が与えられるということです。具体的には、復活の主が弟子たち、つまり教会を通して人と社会に福音を行き渡らすべく活動するという行為が与えられます。

②ではパンの求めに対し、愛という行為の与えが示されます。

③では子の願いという求めに対し、願い通りに与えようとする与えが描かれます。これは例えば、AがBを赦すのは、既にAの心の内に神がBを赦しているというしるしであると当時の人々が考えたのと同じことです。

当時の初代教会の現実には貧しい共産社会でした。スポンサー不在の経済生活の中で彼ら・彼女らの「求め」は研ぎ澄まされてゆきました。それは物質的な解決を「求め」としないということです。そうではなく、こころの解決を「求め」として祈りを完成させて行ったのです。

その結果、すべての「求め」に対する「与え」は②と③のように愛の行為に他なりませんでした。

わたしたちは様々なことを求めます。必要以上の衣食住に金や名誉に地位、さらには健康に長寿、人間関係にまで言及してはまだ不満を漏らします。

もし、祈りがこのようにわたしたちの「ああしたい。こうしたい。」という求めの集積だったならば祈りとは何とくだらないものでしょう。

祈りとは、むしろこのくだらないものに成り下がってしまうことを良しとしないこころの抵抗であり、人としての本来を求める憧憬であり、永遠なるものに誘われ行く魂の高揚であったはずです。

「主の祈り」とは、それら一つひとつが人生の中で少しづつはがされていったものなのかと考えます。祈られる「求め」は、「必要なものは既に満たされ与えられているという事実」なのです。